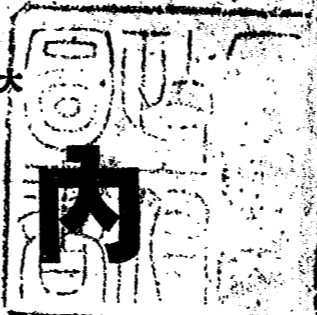


日一十二月二十年二十正大

報情外内

號二十九第



1 2 3 4 5 6 7 8 9 21

目次		(非特載品)
支那	支那棉産の研究	1
	對日米穀輸出解禁問題	七
	海關附加稅問題	八
	福建近情	〇
	廣東南北爭戰後記發電の二十一	一〇
	雲南近事	三
比律賓	比島農業の現状	三
	紛争後最初の比島國家會議	三
	十月の比島對外貿易	三
蘭領東印度	蘭領東印度諸島に關する地質學的研究の發達	128-144
	爪哇及び新嘉坡の漁業	128-144
佛領印度支那	佛領印度支那教育狀況	128-144
	佛領印度に於ける刊行物	128-144
佛領交趾支那人種別人口一覽表(其一)		128-144
佛領交趾支那人種別人口一覽表(其二)		128-144

92
102
128-144

305
20045
4

房官總海軍

305
20045
4

日一十二月二十年二十正大

□佛領交趾支那人種別人口一覽表 (其二)

省名	歐洲人	安南人	柬埔寨人	支那人	カンボウ人	印度人	其他	合計
Dae-jeu	10元	1,330元	1,540元	9,630元	11,090元	5元	1元	27,050元
Paria	310元	7,550元	1,040元	8,910元	3,380元	1元	1元	21,970元
Dantre	10元	2,040元	1,040元	5,350元	3,870元	1元	1元	12,310元
Bien-hou	1,550元	1,550元	1,150元	1,910元	2,550元	1元	1元	13,710元
Can-tho	1,150元	2,550元	2,550元	8,230元	5,550元	1元	1元	26,940元
Quandoc	9元	2,750元	2,750元	3,550元	4,750元	1元	1元	14,300元
Cholon	5元	10,580元	1,040元	1,270元	1,270元	1元	1元	14,110元
Gia-linh	7元	2,750元	1,040元	1,270元	1,270元	1元	1元	7,050元
Long-xuyen	10元	1,040元	1,040元	1,270元	1,270元	1元	1元	5,620元
Mytho	1元	2,040元	1,040元	1,270元	1,270元	1元	1元	5,620元

備考 (一)馬來人、(二)モイ人、(三)日本人を含む、(四)マニラ人を含む、(五)モイ人、(六)チャム人、馬來人、爪哇人を含む、(七)東京安南人及老婦人、(八)爪哇人、(九)日本人、米國人各一名、西班牙人四名を含む、(一〇)東京安南人、(一一)混血佛蘭西人

情報

支那 □支那棉産の研究

(一)棉産減少の原因 支那棉業の振はざるは其の産額少くして棉種供給足らざるが故なり。然るに棉産額の減少せる所以は實に二の大なる原因あり。

(イ)各省棉作場の棉作推廣に注意せざる。各省共に棉作推廣事業に注意せざるが爲、棉の區域増加せず、農民は種棉の良法を知らず、又良好なる棉種なし。此れ棉産額の日に減少する所以の一因なり。

(ロ)農民種棉法の不良なること。支那農家の棉を植うるは、普通には一畝(支那畝)毎に僅に籽棉數十斤を收穫するを常とす。是を米國種棉の少くとも一畝毎に約百餘斤を收むるものに比するに、其の相距る甚だ遠し。此れ支那棉産額の日に減少する所以の二因なり。

然らば農民種棉の不良なるは何の點に在りて存するかといふに左の缺點あるに因る。

(い)種子を貯ふるを知らず。農民が棉を作るに其の種子は常に棉繰工場又は種子賣商人の

第九十二號

處より得來りて自ら其の種子を貯ふことを爲さず。此れ其の害の大なる所以にして、一は種子の不純なると、二は種子の優良ならざると、三は種子の發芽力強からざるとに因る。此の如き劣れる種子を蒔くも其の結果の好からざるは固より其の處なりとす。

(ろ) 種子を選ぶを知らず。種を播くの前其の種子に選擇を加へざれば、種子の小なるもの輕きもの破損せるものも皆混合して蒔附くる譯なれば、芽を發生するもの必ず少く且整齊ならず。澤山なる産額を得んと欲するも能はざるなり。又農民間には亦自ら棉種を貯ふるものあるも、先づ田畝の間に在りて棉株の姿勢や、佳なるものを豫選し能く鈴成れる上に葉を吐くこと早きものを選取し、其籽棉を取りて一處に收藏し置きて明年種植の種子となすことを定むべし。若し完全に收穫を了したる後を待ちて、任意に籽棉を取り以て播種の種子となすが如きは不可なり。

(は) 地整の不精密なること。農民が棉種を取る爲に豫備せるの地は、常に意を加へて地整を爲さず、又全く耕鋤せざるものあり。麥の畦間に或は豆の畦間に棉を植うるが如き、只僅に鋤を以て畦間の土を翻すのみなれば棉の根は土中に落着かざるを以て發達する能はず、隨ひて生長亦不良なり。

(に) 播種法の不良なること。支那農民の棉作は常に逼く種子を蒔くの法を取る。故に一は多

く種子を費すこと、二は距離密に過ぎ易きこと、三は深淺一ならざること、四は草を取り易からざるとの四失あり。

(ほ) 施肥に注意せざること。棉畑に年々棉を作れば、其の養分必ず消失して餘なきに至らん。故に施肥の必要あり。以て地力を保持し且棉をして能く營養に足らしめて生長十分ならしむべきなり。然るに支那農民の棉作するには常に施肥せざるのみならず。且年々同一の地所に棉作を爲す。故に其棉花の産量甚だ少し。棉花に最も必用の養料たる磷酸は土中に缺乏すること甚しく、農民は骨粉米糖等の肥料を施すを知らず。故に人糞を用ひることを知ると雖も亦大益なきを奈何せん。

(へ) 中耕を怠ること。棉畑中耕の回数多ければ多き程佳なるは云ふまでもなし。此れ一は土中の肥料を分解に易からしめて棉の之を吸収するに便するを得、二は雜草を除去するを得、三は土中の水分を保持するを得べきを以てなり。此の三利あるを以て中耕回数多きを佳とす。然るに支那の農民は常に之を怠り只二三回を以て足れりとす。此れ棉花收量の豊ならざる所以なり。

(ど) 病蟲害の豫防對治に不注意なること。農民の棉作に於ける、病蟲の害を加ふるに對しては恒に名づけて天災とし、曾て之を防ぎ治むるに注意せず。故に毎年病蟲害に因るの損失幾何

なるを知らず。是れ誠に棉花産量減少の最大原因なれば、農民は注意して之を防ぎ治めざるべからず。

(ち)耕作の法不良なること。支那農民の耕作は最劣等の耕作法によれるものにて、其の法たる續栽制と毎年二作制とあり。夫れ年々同一の地に種作するは棉其れ自身に對して已に大害ある上に、其の土地亦變じて劣悪と爲り、更に改良の機會を與へず。故に棉の收量亦年々に減少するなり。又毎年二作制を行へば播種の期遅く、又整地に及ばざれば棉花の産量に影響すると甚だ大なり。故に一作制を採用するを要す。

(二)棉花産量を増大するの要項。支那農家の耕作は以上八種の原因に因り收量を減少せしめつゝあるが、若し之を改善して合理的方法を以て棉花を栽培せば、必ず豊産を得て利益甚だ大ならん。普通に農家が其の産量を増加するには左記四項の注意を怠るべからず。

(イ)棉畑の管理宜しきを得ること。即ち整地排水耕耘施肥等皆能く宜しきを得ば一畝毎の棉花産量は少くとも若干を増加すべし。若し整地精細にして排水時に依り、耕耘當を得、施肥に注意され、しかも又能く磷酸肥料等を用ひば何の増收せざることかあらん。

(ロ)栽培作業の時に適すること。栽培作業の時に適するときは費用省かれて收益多く、時を失へば之に反す。播種間苗耕耘摘心收花等皆能く適當の時に於て作業すれば一畝毎の棉花收

量は必ず作業時に依らざるものに比すれば多しとす。

(ハ)純潔優良なる種子を用ひること。種子良好なれば産量必ず豊なるも、種子不良なれば必ず之に反す。故に農家の種子用棉には宜しく自ら種子を留め並に良好なる棉株を選び其の籽棉を別なる所に收め置きて次年の種子用に備ふべきなり。

(ニ)病虫害の防治に注意すること。病虫害は棉の産量に影響すること誠に大なれば、農家は能く患を未然に防ぎ、無形の中に産量の増加を圖るべし。病虫害を防治するの法は病虫害を受けざる棉株を選択して之を輪作し、其の種子を種とし残れる枝葉鈴を焼却し害虫を捕捉する等是なり。此等の方法は簡にして費少し。

(三)全國棉産額増加の要項。支那各地の植棉農家にして苟も能く法を設けて其の一畝毎の産量を増收するに力めば、全國毎年の棉産額自ら増加すべし。只農民一方の其の増收を欲するが如きは易々たるものあるに似たるも、たとひ少數の農家が以上の四項に依り注意を拂ふとするも、全國の農家を皆此の如くなる能はざらしめば其の功果は餘り多しとは云はれじ。故に支那全國の棉産額を増加せんと欲せば、各省の棉作場或は農場の完全なる責任を負はんことを要す。下の如き四項に對し各棉作場或は農場が注意せんに全國に及ぼす利益は莫大ならん。即ち甲米棉を種植することを提唱すること。夫れ米棉の栽植は科大に枝多く且結ぶ所の鈴大にして多



し。故に産量支那よりは豊饒なり。支那各棉區の如き、皆適宜の米棉種を種植すれば、其の毎年の産棉額自ら増加すべし。米棉を推廣せんと欲せば必ず先づ農民をして米棉を栽うるは支那棉よりも利益甚だ大なるを明知せしむるを可とす。(乙)棉區に育種場を設くること。先づ米棉を採り用し之をして支那の栽培に適するの種となしむるには各棉區に於て一の育種場を設けざるべからず。蓋し農民既に米棉の利益大なるを知らば其の種子を受領するの所なくして可ならんや。此れ育種場の必設を要する所以なり。(丙)栽棉新法を推廣すること。各棉作場は棉花栽培の新法と支那種棉の改良とを淺近なる白話書となして出版し農民に分配し、それをして改良植棉の新法に明ならしむべし。此の如くして全國各農家の種棉は始めて合理の方法を採用するに至らん。猶ほ各棉場が能く植棉新法を表に作り、演述し以て農民に之を參觀せしめ、或は實地指導を與へば其の效たる大なるものあらん。(丁)種棉區域の推廣。種棉の區域大なれば大なる程度棉額の増加すること多きは當然の理なり。而して種棉區域の推廣法には農民の種棉利益觀を盛にするを要す。或は文字を用ひて鼓吹し或は實地に指示するも皆可なり。又荒地の棉作に宜しき處は人々に開墾せしめ竝に農民を招いて種植せしむべし。

(四)結論 支那棉産は世界中第三位に居れば亦之を忽緒に附すべからず。只支那は人口衆多なれば其の産する所を以て自給を足すに至らざるを恨とす。故に毎年廣く外國の棉花を用ひる

こと約數千萬元以上に在り。此の如くして進まば紡織事業の原料を缺少するに至らん。故に今日の棉作推廣改良を提倡するものは棉産増加の一項に於て殊に一層の注意を拂はざるべからず。夫れ支那全國には人工多くして工錢賤し。棉作に宜しき地も亦廣くして毎畝の産額平均は又極めて少し。故に到る處棉産を増加するの可能性あり。只當事者の能く切實に注意するや否やに在るのみ。今支那全國の現有棉畑約三千萬畝とし、毎畝に籽花三十斤を收むとせば、年には九百萬擔を得べし。一擔の價十元として計算せば茲に九千萬元の價を得ん。若し良好なる栽培法を以て種棉を作り、毎畝に十斤づゝを増收するを得しめば、年に少くとも三千万元の漏卮を減するを得ん。此に由りて觀れば支那棉産額を増加すること想うて見るべし。

(十一月十四日—經濟新聞—王養也)

□對日米穀輸出解禁問題

我が芳澤公使の要求に基き北京政府は右要求受理を決し、爾來頻りに協議する所ありしが九月五日の閣議に於ては其の期間及輸出高に對し議論を異にする者あり。外交總長顧維鈞は期限三箇月間、三十萬石を指定すべしと唱へ、内務總長高凌霨は現時各省の存米不明なるを以て江蘇安徽兩省當局に其調査を命ずべしと主張し決議を了するに至らざりしが、六日に至り北京

國務院の名義を以て各省長官に米穀の調査及輸出解禁可能高の意見を徴せしが、翌七日江蘇浙江安徽の三省長官に對し各五十萬石の對日輸出解禁を命じ、輸出港として上海大連の二港を指定せり。然るに本問題は八日以來各團體よりの反對あり蓋し各商團反對の要旨は十日上海總商會が江蘇省長に打電せる一節に據り其一般を察知し得べし。日本の震災は大變事なりと雖も關東一部にして地方富裕を以てせば糧食に不足することなきは日本駐滬領事の言明にても明確なり。又北京芳澤公使が外交部に對し解禁を要求せるは當時事件勃發の際被害程度不明にて萬一を慮りしに因る。特に支那は多年の戰禍最近の大雨等により餘米多からず。現に上海にては十四元(二石)に昂騰せる有様なるを以て目下解禁を實行せば日本を補救するの效なく、却つて奸商に乗せられ、而して支那國民をして米酒騰貴に苦しましむるのみ云々と。之れに對し江蘇省長は江蘇省米の輸出禁止は絕對解禁せず 江海關監督 上海稅關に對して隨時購運を勸阻する機電命せりと回答せり。(十六日)

□海關附加稅問題

千九百二十一年北支那五省旱災の例に照らし全國海關常關に對し「向ふ一年間一割の附加稅を徴し半額を日本震災に殘額を内國の賑災に充當す」との案に反し、列國の同意を得るの困難なるは勿論、國內の反對激烈となりしものにて、全國商會聯合會江蘇事務所及南京總商會が全

國に通電せる内容により其要旨を推知し得べし。義捐金の募集は自由性質のものにして強制的のものにあらざるも、附加稅は強制的のものにて之れに賛するを得ず、且つ義捐金募集は僅かに富有者に限るも附加稅は小商人に迄累を及ぼす。以上の理由を以て先年北支那旱災に際しても各地商人之れに反對せしが、政府は遂に附加稅に名を藉り斂財の實を行ひ人民の主張を顧みざりき。殊に附加稅收入の用途は一切秘密にされ國民の信用を失墜せり。今次支那國民は日本の震災に對し人類の本義に基きて救濟の誼を盡せること敢て人後に落ちず。然るに攝政内閣は政變以來印紙稅、銅元票を偽造し民を殃して惜まざるが、若し日本の震災を藉りて附加稅せば何人か其斂財亂政なるを信せざる者あらん。若し政府が附加稅を強迫せば附加稅施行の日より貨物稅の納入を停止すべし云々。

但し本問題は其後日本公使も外交部の交渉の結果二十四日に至つて協定を見、商人が震災救恤の目的を以て營利の爲めに輸出すると否とを問はず、防穀令解禁の主旨に基き次の條件にて一律に許可することゝなれり。

- 一、護照費は稅關の計らひで百斤に一元(從來一元五角なりしを減せり)及所定の海關稅を納付すること。
- 二、手續としては米の種類輸出入港護照の必要枚數(一枚毎に所要數量を明記す)を明記し護

照費及印花税を添へ財政部の輸出許可を請願するを要すること。(九月十五日上海情報)

福建近情

王軍官橋に克つ 十二日王永泉は磁灶安海の二路よりして官橋を攻め民軍敗退したれば、王軍は嶺兜に進み別に一路の軍は溪尾を攻めたるが、勝負未だ明ならず。泉州新門外に銃聲聞ゆるは想ふに民軍が石壘より放てるものならんか。(十一月十三日廈門電)

王部の洪瀨圍攻 王永泉は郭團に命じ洪瀨を包圍攻撃せしめ、連日民軍と石壘に在りて戦ひ居れり。(十一月十四日廈門電)

興泉軍用電線開通 泉州の興泉衛司令部軍用電線は七日既に開通せり。

黄頼王と孫主の打合 黄大偉頼世璜王獻臣は代表曹傑盧史南彰等を派し、八日省城に到着、孫傳芳王永泉と共に下游の軍事解決方針を打合せ中なり。

釐金税押收 上游なる周軍は又釐金税を押收したり。

財政會議を召集せん 福州幫辦署顧問諮議等の手當も停止されたれば、孫傳芳は財政會議を召集せんとしつゝあり。

軍事會議又開かれん 孫傳芳は聯軍代表の省城に在るを以て、之を機會に軍事會議を開かん

と欲し、已に楊樹莊に通知書を發し其の省城に來らんことを求めたり。

烟苗禁種の議決 十二日美以美教會天安堂に開かれたる年會に於て、恒會督より烟苗禁種案を提出したるが、遂に英佛米三國領事より當局に向つて嚴重交渉することを議決したり。同時に恒會督は「須く先づ教會中の人より取締り、次に又外交を後援とするを要す」と説及ぼせり。(以上十一月十四日福州電)

王軍楊漢烈を破る 十三日楊漢烈部三千餘人は白雀嶺より進んで泉州を攻めけるが、王永泉司令は第七旅九團王團長達を派し、全部を率ゐて前進接戦せしめ、戦ふこと一晝夜、楊部遂に支へず、敗れて安溪に退く。王團長親しく所部を率ゐて奮然追撃をかけ、十四日午後已に溪尾を占領し楊部數百人を擊殺し、生擒するもの其の數を知らず。洪瀨官橋も亦激戦なりしも皆王軍の勝利に歸せり。(十一月十五日福州電)

黄大偉油頭に歸る 黄大偉は油頭に返りたるの報あり。

臺匪毆傷事件の交渉 十四日晚方警察より臺匪を捕へたる後、臺匪は警察分所を包圍攻撃し、一販商の街上に在りしものを斃し總司令部副官楊姓を捕へ日本警部に手交したり。賊軍は街中を搜捕せる上、委員を派し日本領事に向つて嚴重交渉中なり。(以上十一月十五日廈門電)

仙遊縣の烟禍 民國七年以來烟苗播種を競ひし爲、流毒漸く甚しからんとする原因に三あり。

即ち(一)は農民の利を食ふこと。(二)は當局が其の烟税を涉獵すること。(三)は紳士が烟税を受負ふ爲富を得しこと是なり。然るに今回は右三原因の中一原因も存在せず。蓋し農民は已に自覺する所ありて再び此の毒草を種うるを欲せざればなり。今其の故を尋ねるに(一)省軍が仙遊を收復されしより以後、一日として勅借の聲を聞かざるはなく、民間の負擔は極端に達せり。故に若し烟苗を栽えば其の烟捐を嚴催されんこと必定なれば、恐れて之を避け居れる爲なり。又(三)に春の時候には粵軍尤も酷に烟税を取立て、税率至りて大なるが上、中他の害甚しく、農民反りて烟苗を種うるに困りて家産を蕩盡せしものあるに至りしに因る。更に(三)仙遊には烟土甚だ多くして價格思はしからず。烟税並に諸掛を差引けば残る所の利益は幾何もなし。故に今回種烟を爲さざれば價格随ひて昂騰し後日の利と爲るべきを思ひ居ればなり。是に於て仙遊の當局者は人民に種烟を迫るの已むを得ざるに至る。而して其の手先となりし悪紳は即ち所謂善後維持處なる諸員なるのみ。烟苗捐なる税目は昔日の田畝捐にて、一畝毎の税率は現に大洋十二元の割なるが、實は軍費不足の結果必ず他日は増徴をなすに至らん。今や烟土の種子を下せる上に徵税機關も設立されたれば烟税豫收の消息まで傳はり人民大に惶惑し居るも、當局者は更に之を意とせざるに似たり。維持處中の有力人物には悪紳の名高き傅瑛陳玉錫あり。各里受負の紳士は皆此の傳陳二人の手を経て始めて志願を満たすを得つゝあり。仙遊種烟の地は各

郷に在りて城市の地に在らず。而して各郷は皆民軍勢力の及ぶ所にして城市の如き省軍の固守し易きものに非ず。故に烟税徵收の時に及べば必ず民軍の指を之に染むるもの出でん。現に仙遊の民軍首領には吳鐵胎陳國棟あり。中にも吳鐵胎の所部は極めて軍需に乏しければ、必ず官軍の烟税を徵收せるを坐視すべき筈なし。今烟苗強迫栽種の行はるゝに仙遊縣下更に反對の聲なきは如何といふに、凡そ三因あり。即ち(一)習慣已に久しければ別に怪まざると、(二)紳士の烟税を受負ふもの仍は安分知足のもの多きと、(三)外省或は外國に在留せる仙遊人が眼光魄力に秀でたるもの少きとに因るといふ。(十一月十五日—福建日報)

莆田強迫種烟の反對 十五日午後莆田人の省城に在るもの約數百人は手に白旗を捧げ省議會及び省長公署に赴き請願する所ありしは、全く莆田縣知事黃紉が軍隊を率ゐて農民に強迫種烟せしめ、田一畝毎に十二元を收納せしめ、若し種烟を願はざるものは一畝に付六元づゝの税を收めしめ、甚だしきは農民の已に麥を種うるものは皆刈去らるゝに至れる爲なり。故に該省城在留莆田人は省長に向ひ下の如き要求を提出せり。即ち(一)種烟を嚴禁し勅種委員を撤回し、田畝捐を取消すこと。(二)該知事黃紉を撤退して懲戒することを求むるといふ是なり。(十一月十七日—福建日報) 因に云ふ莆田の勅種委員即ち善後委員の姓名は蕭濟頤林允恭翁曾聲詹毓麟黃震潘慶星陳謙光黃遂卿陳心如黃達卿胡書香蕭澤聰黃金聲王品如戴元哲李星鶴黃雄

亞陳登津黃葆琮黃紀許紹分林達夫林揚成なり。(同十八日同上報)

□廣東南北爭戰後記彙電の二十一

粵軍博羅占領布告 潮梅粵軍總指揮處九日附布告に云く、洪兆麟發九日附電報に據るに、我が軍七日進んで博羅を攻めたるが、敵約五千人は高山に據守し激戦すること一晝夜、八日晚我が軍全く博羅を占め、銃千餘挺機關銃數挺を奪ふ。敵は石龍に向ひて逃ると。又聞く羅定軍隊及び團練は忽ち粵軍旗を改め懸け、官署は爆竹を放ちて祝賀せりと。

深鎮粵軍の退却 深鎮なる粵軍は龍崗墟に退く。聞く廣九路には已に粵軍の踪跡なしと。

聯軍の資安奪回 聯軍は十日資安縣城を奪回したり。粵軍の敗兵數十人は武器を棄て、香港に逃れたり。

粵軍の敵艦截獲 粵軍劉志陸の部は四日晚蘇村なる圓頭郷に在りて聯軍の軍艦を截獲したるに、内に銃器三百餘挺、彈六十箱、馬二匹、俘兵二十餘人ありき。(以上十一月十一日香港電)

粵軍四路石龍を指す 潮梅粵軍總指揮處十一日附提報に云く、惠州十日附發電に據るに、八日朝林虎は部を率ゐて埔前黃麻廠より前に向ひて撲撃し、敵大敗せり。銃八百餘挺砲三門を奪へり。九日追ひて響水及び蘇村に至り朱培德部の銃千五百挺砲四門機關銃五挺を奪へり。十一日

四路を分ちて總攻撃するに定む。四路とは即ち(一)林は兩黃劉王陳の各部を率ゐて、響水より石龍に向ひて進み。(二)洪兆麟は尹朱の軍を率ゐて、蘇村より石龍に向ひて進み、(三)熊羅の部は鴨仔步より樟木頭に向ひて進み、(四)翁練葉鍾の各部は龍崗より平湖に向ひて進むといふ是なり。

聯軍の反攻と粵軍 東江戦事の焦點は廣九路より移りて博羅に至れり。洪兆麟等の部は樟木頭に失敗せしより即時退ひて中路に折回して戦を助け、同時に大隊を飛鷺嶺に分布して、聯軍が惠州を抄撃するを禦ぐ。粵軍八日博羅を占め、隨ひて蘇村をも收め、聯軍は義蘭に退けり。孫文氏は九日李炳鈞と共に石龍に至り、即時劉震寰等を集めて軍事會議を開き、決して劉等をして即日反攻せしめ、同時に右翼范蔣等をして虚に乗じて惠州を抄撃せしめ、兵一部を分ちて石灘に赴き増城粵軍の進み窺ふを防がしむ。十一日午前九時聯軍三路を分ちて反攻し、蘇村博羅は劇戦中なり。

聯軍の廣九路克復 聯軍は七日平湖を克復し、八日深鎮を奪ひたれば、廣九路の粵軍は皆已に肅静に歸せり。孫文氏は工程師に命じて各停車場を修理せしめつゝあり。

聯軍王秉鈞の電告 我が軍鐵路に沿ひ撃退せるところの敵は退いて黎村鋪仔に據る。鈞は四六の二師を率ゐて追撃し、八日曉を以て攻撃を加へたり。然るに洪兆麟一師楊坤如二旅共に八

千餘の増加をなし、洪揚親しく自ら戦を督したるも、我が四六の二師が猛撃せる爲め、敵終に支へず鴨仔歩に向つて退けり。鈞乃ち部に命じて追撃せしめ、已に鴨仔歩を占め共に銃百餘挺を奪ひ、俘虜二百餘あり。

李烈鈞惠州攻破を報す。李烈鈞は十一日未刻石龍より電告して曰く、我が右翼軍は十日正午惠州城を攻破りたるが、敵は海陸豊に向つて潰退したりと。

北江滇軍の東江行。北江の滇軍朱淬の部三千餘人は昨日汽車に乗じて省城に返り、黄沙にて民房を借りて之に住せり。然れども即日直に東江に調集せらるゝ筈なり。

楊希閔代理を置く。楊希閔は楊廷培に委任して廣州衛戍司理を代理せしむ。

省城陳黨を防ぐこと嚴。廣州當道は陳炯明の黨羽が廣州に遍布せるに因り、昨衛戍司令は各街店戸に布告し、若し親戚の往來せるものときは必ず警區に赴いて報明せしめ、又雜賭を嚴禁したり。蓋し陳炯明黨の賭館に入だまふことを恐れてなり。但し今日各街の雜賭は仍ほ開設すること平常の如し。

林虎博羅に現はる。林虎は已に柏塘泰尾の一路を打通して博羅の粵軍と會合したれば、許軍滇軍は均しく礮水に退けり。聞く林虎は現に博羅に在りといふ。(以上十一月十二日香港電)

廣九路員の實話。十三日廣九鐵路員の省城より眷屬を香港に遷したるもの言によるに、粵

軍は攻めて石龍に至り已に石灘停車場を通過し了れりといふ。

聯軍紛々廣州に歸る。十一日晚廣九停車場は連夜軍隊を廣州に運回すること已に一萬餘人に及ぶ。十三日粵軍練演雄の部は復た廣九路深鎮布吉李郎平湖等の各停車場を占領せり。

石龍失守の電音。聯軍陳天太の部に屬する某營長は十三日香港に來り、自ら言ふ、十二日晚陳天太の電報には石龍已に守を失へりと。さればにや十三日省城より香港に來れる日本船は非常に多數なる乗客ありて皆眷屬を香港に遷しつゝあり。聞く孫文氏も十二日正午石龍の危急なるを以て單身省城に歸りたるが、更に衛隊を有せざりきといふ。歸廣後孫文氏は大沙頭に到り。直に電氣船に乗じて大本營に返り、前敵の戦事は現に李烈鈞が石灘に駐りて之を主持し居れり、許崇智劉震寰は皆退いて石龍に駐る。粵軍石龍を攻むること甚だ急、連日前敵より退いて石灘に返るの許滇軍約七八千あり。形勢危急なり。

黃志桓就任通電。黃志桓は十月二十八日八屬聯軍第三軍々長職に就きしことを通電せり。

惠城攻破の祝賀は策か。公安局は十一日汽動車を以て馬路一帶に惠城陥落のピラを撒かせ、軍政各機關は祝砲を放ち、國民黨員は汽動車にて游行し、省報には惠州捷報電三通を載せあるが皆石龍發にて其の語甚だ簡短なり。但し三通の捷電には或は十日惠州陥落といひ、或は十一日といふ。而して范石生が十二日夜石龍よりの電には敵五千二十日蘇村博羅より石龍を襲ふ。

我部を率ゐて之を痛撃し、戦ふこと五時間敵支へず。戰場にて銃器三千五挺砲二門を押收し楊坤如は殆ど擒にせられんとしたり。現に石龍石灘の鐵路に沿ひ皆敵の痕跡なしとあり。

石龍占領は林虎軍 中路粵軍の林虎等の部は十二日夜石龍石灘を占領し、現に廣州に向ひ進發しつゝあり。聯軍は仙村新塘一帶に在り防禦陣地を布き、其の輜重及び大部の軍隊は已に廣州に返り、觀音山白雲山に防禦を布けり。

廣州官民の逃支度 廣州在留の官民眷屬は今朝日本船に乗じ香港に來るも甚だ多し。

(以上十一月十三日香港電)

粵軍の石龍石灘占領 粵軍は十一日總攻撃を行ひ十二日石龍石灘を占領せること事實となり。粵軍が石龍を攻むるの時に當り、孫文氏は石灘に在り、衛隊に命じ機關銃を用ひて聯軍敗兵の退却を制止せしめたるに、敗兵乃ち戈を倒にし孫氏の衛隊に向ひて射撃し之を斃すこと數多に及ぶ。孫文氏も手部に傷を受け即時汽車の車頭に乘じ司機者をして先づ駛せて省城に歸らしめ花車に登る能はざりき。車頭新塘を経る時郷民に銃撃せられ又數人を喪ふ。衛隊孫氏を尋ねるも獲ず。現に楊希閔朱培德皆省城に到着し、朱世貴は省城到着後直に香港に赴けり。滇軍朱槐の部は十二日晚部を率ゐて仙村に赴き防禦を施しつゝあるが、劉震寰嚴兆豐の部は盡く譁變し、旅長任鶴年は行方不明なり。

孫軍の防線 孫氏石龍に在りし時、曾て緊急會議を開きて決定すらく、石龍石灘守を失ふ時は仙村を以て第一防線と爲し、龍眼洞を第二防線と爲し、白雲山觀音山を第三防線と爲すと。而して十三日朝廣州にて傳ふる所によれば粵軍前鋒已に仙村に到着せりと。此れより廣州までは尙六驛あり各主要員は皆星散し。各店戸は多く鐵閘を以て閉鎖し居れりといふ。

聯軍前鋒は石牌に在り 聯軍の前鋒は現に石牌に駐れるが、こは莫雄の所部にして、許崇智部も此の地に在りて防禦陣地を布き居れり。

大本營會議 孫文氏は十三日大本營に在りて軍事會議を開く。許崇智曰く、我が軍既に石龍石灘を退きたれば、更に退くの餘地なし。只此の地に在りて一戦し以て轉機を待たんのみと。李烈鈞楊希閔は某軍官の議を賛成し退いて北江を守るの説を主張せしも衆皆之に賛成せざりければ遂に許氏の議に従へりといふ。

聯軍惠城占領説は不實 粵軍後方辦事處は十二日已に海豐より遷りて惠州城に遷れり。前に聯軍惠城占領の説ありしもそは不確なるを證するに足る。

徒手兵省城に返る 聞く劉都嚴師已に譁變し、任鶴年の部は退却及ばざるを以て失踪したり。粵軍は石龍より追撃に轉じたるが、聯軍は抵抗せずして南崗に退けり。范石生は令を下しこれよりは再び退くを許さず。若し尙ほ退くものは武器を押收すべしと申明せるに拘らず、各軍仍

は續いて退きければ、范乃ち其の武器を押し鈍千餘挺を得たり。故に十三日朝徒手兵千餘人の省城に返るを見たるなり。

仙村の防備 朱淮の全旅團は已に仙村に到着して粵軍の再進を喰止め居れり。朱部には一營毎に矛を持てるもの數十人づゝあり。此れ前鋒衝入の用に供する爲なりといふ。

孫氏譚延闓を呼回す 孫氏は譚延闓に打電し師を回へして粵を救はしめたるが、譚部は三日に到着すべしと傳ふ。

許劉石陂に向ふ 許崇智劉震寰は十三日朝省城に到着、随ひて即時石陂に向ひ出發し潰兵を收容しつゝあり。

石龍仍ほ聯軍の手に在る歟 省報に云ふ、聯軍の右翼范蔣等の部は中路の急を告ぐるが爲、惠州を棄て、還り救ひ、十一日石龍に到着せりと。又滇軍東江兵站部十三日亥刻の布告には、現に范軍長石龍に駐り、砲營長石灘を守り居れり。只沿途土匪の狙撃ありて電話電線共に通せず。故に第二師を派して肅清に従事せしめたりとあり。

程潜の布告 十三日程潜は布告を發して云く、本日義蘭方面なる一部新兵は誤解に依りて退却したるが、已に力を竭して之を收容中なり。又我が滇軍一師團は全部韶關より出動し來りたれば、もはや逆氣を掃淨するは容易なりと。(以上十一月十四日一香港電)

滇軍掘壕に忙し 十四日滇軍楊廷培王秉鈞部退いて廣州に返る。沙河東山瘦狗嶺白雲山の一帶には戰壕を掘ること甚だ忙し。

林虎の廣州襲攻策 聞く林虎石龍を占領せし後又戰略を變じ、大隊を派し從化より迂回して廣州を襲はしめんとすと。十四日朝楊廷培王秉鈞等の部なる滇軍は廣州鐵路により龍眼洞・白雲山等の處に返りて林軍の來襲を防げり。

孫氏は湖南に入らん 孫氏は廣州若し守る能はざる時は計を決して北江に退き湖南に入るべしと傳へらる。

東山の米國無電臺 東山に住せる洋人は該處に在りて無線電臺を設け、警あるの時該國軍艦と通電するの用に供せり。十四日米國軍艦水兵上陸し來り、東山に到り地を度りて建築に従事せり。

省中各報の失實 粵軍が石龍石灘を占領せる事は確實なると、連日の省中各新聞は檢閲の爲之を登載するを得ず。十五日に至り已に石龍を失ひしことを登載したるも、只聯軍の仍ほ石灘に駐りて第一防線と爲れることを言ひ、又十日北軍の南雄に來れるを載せたるも、此れ樊毓秀部二千人が來りて孫文氏を助くるものなることを示せり。

石龍聯軍の損失は大 石龍の一戰役に於て聯軍の損失は一萬餘人に達し、現に徒手兵の廣州

に返るもの約一萬人あり。皆東校場に留れり。孫文氏は之を置くに法なく、商場は其の暴動せんことを恐れ、多くは門を下して自ら防ぎつゝあり。

總司令指揮の孫令 孫文氏は楊希閔を聯軍總司令と爲し、李烈鈞を聯軍總指揮に任命せり。

東江一帯死屍三萬 惠州より來れる人の言によると、東江一帯に遍布せる死屍は約三萬餘に上り居るも、多くは人夫にして兵士に非ずといふ。(以上十一月十五日香港電)

雲南近事

日本震災遭難者追悼會 雲南にては十一月二日から八日まで省城圓通寺にて日本震災遭難者追悼の爲め大法會を執行中なりしが、同九日送寢式を行へり。即ち同法會に安置せし日本震災遭難各國人の靈位と、同震災に薨去あらせられし宮殿下、外知名の日本人の位牌を圓通寺より市外まで送りしが、其の行列の長きこと十餘丁に及び頗る盛況なりき。圓通寺發及び南門通過の際は、各九發の吊砲を放ち、各官衙は休廳し、市中各戸に國旗を掲げしむる等、雲南省政府の熱誠なる吊意は、恰も自國內の災厄に對するが如き状態なりき。(十一月十二日雲南情報)

比律賓

比島農業の現状

農業の重要價値は、漁業の四倍、鑛業の七十倍、林業及挽材業の十三倍である。以上は、ビ・デー・ウエスター氏が編纂し、農務局長ヘルナンデス氏に提出せし「國內産業」中に示さる、數字の概要である。比島の産物は之を五大別する事が出来る。即ち數字の上から見ると、其の第一は農産物、第二は林産物、第三鑛産物、第四海産物、第五工産物の順位である。最近林務局で行はれた調査は、左の事實を語つてゐる。曰く、五六%即ち一六、六〇九、〇〇〇ヘクタールは商業的森林地、七五%即ち二、二三九、〇〇〇ヘクタールは非商業的森林地、一八、八%即ち五、五二九、〇〇〇ヘクタールは草生地、一二、三%即ち三、六四四、〇〇〇ヘクタールは耕作地、〇、九%即ち二、六三、〇〇〇ヘクタールはマングローヴ林地、四、一五%即ち三四七、〇〇〇ヘクタールは依然未踏の儘の地方である。

而して、此の所謂數字に依ると、一九二一年に産出された農作物の總價額は四五〇、七三二、七二五比で、此中一五六、八九二、六八〇比は米となつてゐる。同年中、一、六七三、三八一ヘクタールの地積より産出された米の數量は三一、一〇八、九〇五百立突で、甘蔗は二四一、三四五ヘクタールより五三四、一四三米突噸、玉黍蜀は五四三、八二八ヘクタールより五、一六二、九九七立突、アバカは五四八、〇九二ヘクタールより一〇八、三五三米突噸であつた。但し、以上の外にも尙ほ若干の農産物は相當の數量を産出した。

次に此年の動物産額は四七二、五八八、三九八比で、此が大部分は水牛、牛、馬、豚、山羊及羊であつた。

此の數字に依ると一九二一年中の農産品輸出總額は一三九、〇四六、〇〇〇比で、コブラのみでも二六、一四七、〇〇〇比を輸出した。(マニラ・タイムス十一月六日)

□紛争後最初の比島國家會議

去る七月ウッド總督と比島政府比島人大官連の間に、彼の問題の紛争が勃發して以來、最初の比島國政會議が今朝開かれた。本會議は總督府で招集せられ、之に列席したのはケン上院議長、デラーステラス臨時下院議長、及び各省長官代理の面々で、總督は例の如く議長として之を主宰した。

ミンドロ選出下院議員ルーナー氏其他卓越せる政客等が本日言明せし所に據ると、ウッド總督の態度は一變し、今や若りに協力を求めつゝあり、而も、被統治者の好意を除外しては、到底成功的に統治の實を擧げ得られぬ事を自覺してゐるとの事である。他方ウッド總督は本社員に語つて曰く、今朝の國政會議に於ては單に紋切形の議事がなされたに過ぎなかつた。因に總督は明朝も尙ほ引續き本機關別個の會議招集を通告した。(マニラ・タイムス十一月二十一日)

□十月の比島對外貿易

只今關稅局で發表された指數に據ると、十月中の比島對外貿易は一、九八六、九〇六比の出超を告げてゐる。即ち、其の輸入總額は僅かに一三、二二二、七〇一比で、之に對する輸出總額は一五、二〇九、六〇七比であつた。而して、當月の主要輸入品は左の如くである。

綿布 一、九八一、〇六六比 鐵及鋼 一、二一九、二五六比 綿布を除く綿製品 一、一三五、一〇五比 米 一、一〇六、七四八比 乳製品 五四一、三三五比 小麥粉 五一〇、一一四比

右の内、當月の米輸入額は十月迄に於ける最高記録を示せるもので、即ち、該數量は一〇、四〇八、七五八疋であつた。因に、昨年同月中の輸入米數量は、本年當月の夫れの二分一以下で、四、六二八、五二四疋であつた。

主要輸出品としては、コブラ 三、四四二、八四五比 ヘンブ 三、〇六五、三八七比 油類 二、二五六、九三五比 砂糖 一、四七一、一九八比 煙草 一、〇八三、八二八比 木材 一、三三〇、七二五比 刺繍品 一、四八〇、三六二比 コブラミール 三三二、六九九比であつた。

上記指數に於て、常時は輸出品目中其の首位を占めて來た砂糖の輸出額が、當月第四位に没

落した事は注目を値する。

合衆國を筆頭に、其他海外諸邦への當月の該輸出額は六、四七三、六四二疋で、内二、三三二、三五〇疋はセントロップニューガル糖、四、一三三、九四〇疋は粗糖、一一七、三五二疋は白糖であつた。

次に當月の比島貿易總額二八、四三三、三〇八比の内、合衆國の割前は二七、一八六、六八〇比で、更に此内七、四三八、九〇一比は輸入額、九、七四七、七七九比は輸出額である。日本の該割前は二、二五八、二五一比で第二位を占め、英國、佛國、佛領印度支那及び支那は各々一、〇〇〇、〇〇〇比以上であつた。

米國船は當月貨物總額一、一〇〇、二五二比を輸送し、各國船舶中第一位を占め、第二位は英國船の一、二八八、五四七比であつた。尙ほ日本及び和蘭船も、夫々多量の貨物を輸送した。

十月中に比島諸港に入港した船舶数は八七隻で、此の純噸數二八七、三三三噸、此等は貨物一、〇七七三噸を積入れ、九五、〇二八噸を荷卸した。(マニラ、タイムス 十一月二十二日)

□ウツド總督の爪哇行

既報の如く本國政府國務省の委囑を受け、三週間の豫定を以て爪哇を公式訪問せんとするウ

ツド總督一行は、愈々昨夜半快走船「アポー」號に乘組み當地を出帆した。

一行は左の如き顔觸れであつた。

ウツド總督夫妻、フランセス・ジャツドスン(總督夫人の令姪)、ゴルドン・シヨンドン大佐夫妻、オスボン・ウツド大尉夫妻、總督附醫術顧問イー・エル・マンスン大佐、米國海軍駐在武官比島無線電信部主任ラヴエンダー少佐 以上。

尙ほ、總督は蘭領東印度總督に對して公式訪問をなす筈で、一行は歸路新嘉坡及びサムボアングを経由して馬尼ラへ歸着する由である。但し、往航にもサムボアングへは寄港するであらう。

總督及び其一行が昨夜乗船せる「アポー」號が、愈々比島海上を離るゝと同時に、副總督兼文部省長官ユー・デー・エイ・ギルモア氏が總督代理となり、總督が比島領内へ歸還する時迄留守を預る筈である。ウツド總督は昨日ケンソ上院議長及びアラーヌ臨時下院議長とに書翰を送り、總督が比島海上を離るゝと同時にギルモア副總督が其の事務を繼承すべきを申送つた。

メラカニヤンに於ける行政諸官衙に、アポー號が比島境界線を通過する正確なる時日を無線を以て通告すべき諸準備は既に成されてゐる。(マニラ、タイムス 十一月二十五日)

蘭領東印度

蘭領東印度諸島に關する地質學的研究の發達 (上)

フアン・エス・(L. van Es) エル・ルテン(L. Rutten) 共述

△譯者序言。蘭領東印度が、地質學上から見て、或は又金石學の見地よりして非常に興味ある所であることは、今改めて云ふ迄もない。譯者は、蘭領東印度の地質學金石學に就て手掛りを得たいといふ考へから、同地に於ける政治産業の一般を説明せる Verbeek の中、鑛業に關する部分を取て見たが官營錫鑛業、民營錫鑛業、官營石炭探掘業、石油探掘業、採金業等現在各方面に行はれてゐる鑛業の一般を説明せるのみで、蘭領東印度の全體を地質學上金石學上の立場より記述してゐない。更に官營圖書販賣所に就き、同所に於て販賣する フアン・ヘルダー著鑛山局員必携地質學概論 (Dr. J. K. van Gelder, Valmeuseum v/h personeel v/h Mijnwezen) を購求一讀したが、地質學の一般を述ぶるに止まり、特に蘭領東印度に關して記述せる部分は至て尠ない。フアーベーク及フエン・オマ著爪哇・アドウラの地質學的記述 (Verbeek en Fennema, Geologische beschrijving van Java en Madoera) ーノイヒ著金石學必携 (P. Hovig, Valmeuseum Mineralogie) フアン・ダ・フラフト著蘭領東印度鑛物探査報告 (van der Graacht, Rapport over de opsporing van delictstoffen in N. I.) は絶版にて購讀することが出来なかつた。併し、前記フアン・ヘルダーの著を見た

時の經驗から考へて、フアーベーク及フエン・オマ著爪哇・アドウラの地質學的記述を除いて、他は吾人の求むる所を説明する様には思はれなかつた。譯者は、或機會に於て、ホイテントオルフ農商工務省附屬農事試驗場地質技師ドクトル・ホワイト (Dr. J. Th. White) に會ひ、蘭領東印度の地質金石を全般的に説明せる良書を指示する様御願ひしたる所、ドクトル・ホワイトは、自分の知れる範圍に於ては左様な書物はない、蘭領東印度に關する地質學を究めんとするならば鑛山局の年報を逐次讀破するの外はないと言て、數萬頁よりなる、書棚上の書籍を指した。ドクトル・ホワイトの此答は、地質學の研究を専業とせざる譯者に取ては、却て非常なる難題であつた。譯者は、其後、然らば鑛山局の年報中の何れの部分を捉へて讀んだならば、吾人の目的とする所が達せらるゝかに就て考へた。此處に譯載する所は、非常に簡單なるものではあるが、吾人の如き目的を持つてゐる者には、何れの年報を讀まなければならぬかを説明すると共に、蘭領東印度諸島に關する地質學的研究が今日の程度迄進んでゐるかを明示し、如何なる手段を以て地質學的金石學的研究を進めて行かなければならぬかを吾人に教ゆるものである。即ち、フアン・エス及エル・ルテンの著は、蘭領諸島に關する地質學金石學の Propaedeutic 又は Compendium が見ることが出来る。

△地質學的研究の發達に關するエル・ルテンの敘述。地質學は、全體として新しい學問である。

であるから此學問が舊文明の中心地(即ち歐米)に於てよりは、植民地に於て尙ほ未だ幼稚であるといふ事も直ちに了解出来る。而のみならず、吾が蘭領東印度は、大部分植物を以て密に覆はれてゐる。際涯なき森林は、横はれる岩を遮蔽し、各種の岩石は、熱帶地に於ける寒暑風雨の關係に依り、可成りの深度に迄侵蝕せられ、或は黄色或は褐色或は赤色の土壤に化し、岩石本來の特質を失つてゐる。加是、此種の土壤は、樹木の根帯と殆んど不可分の關係に在るから、是れを取除いて其下に横はれる岩石を検査すること容易でない。森林は又、到る處に於て内陸の方に探検旅行を企つる科學者等に取て、一大障壁を形作るのである。

斯の如くであるから、吾人が今日蘭領印度に於て有する地質學上の知識は、舊開地(蘭領東印度の如き新開地に對していふ譯者)例へば北西歐羅巴、北米の東部、南亞弗利加及び亞米利加の或部分に於けるもの、如くに深厚でない。南亞弗利加及亞米利加の或部分は、樹木鬱茂せる蘭印諸島に比較すれば不毛なりと謂ふも不可ならず、地質學的探検を容易ならしむるのである。

以上述べたるが如き要素は、蘭領印度の或部分をして今日も尙ほ地質學上から言て未知の土地たらしむるものであるが、地質學的探検を困難ならしむる今一つの原因として、吾人は蘭領印度なるものが、互ひに相同じからざる多數の地質學的單位より成立つてゐる事實を挙げねば

ならぬ。異質混成の最も顯著なる一例として、吾人はセレベス島を挙ぐる事が出来る。斯の如くなるが故に、蘭印の一つの部分から其周邊を形作る所の諸々の部分に對しては、同一の頭を以て探検を續行することが出来ない。

馬來群島の地質を科學的に研究せる者の中で最年長者たるドクトルラアベーク(前出)は、晩年になつてから一團の出版物を公けにするに至つた。ラアベークは、目下非常の老體なるにも拘はらず尙ほ續々出版物を刊行してゐるのであるが、此等群島の地質を研究せんとする將來の學者は、永く氏の勞作を多とする事であらう。此處に所謂出版物とは、蘭領東印度の地質鑛業に關する文獻(*Opave van geschriften over geologie en mijnbouw van N. O. I.*)を指していふのであつて、和蘭及蘭領植民地地質探鑛學會(*Geologisch Mijnbouwkundig Genootschap voor Nederlandsch Kolonien*)發表の論文として一九一二年以來海牙の同會より逐次發表せられてゐるのである。此文獻中には、今日迄無慮三千六百種の出版物が發表せられて居り、其數は毎年一内外づゝ増加してゐるのである。依是觀是、馬來群島の地質に關する知識が今尙ほ幼稚であるのは、地質學に關する研究が少數であるからでなく、同方面に於ける地質學的調査が、常に他に於て見られざる底の困難を伴ふからである。

余の此小冊子は、馬來群島の地質に關して今日迄出版せられたる小冊子の悉くを列記するこ

と出来ない。全部を網羅せんとすれば、先づ第一に論文の嵩が餘りに大きくなる。次に、左様な試みをするとしても、結局はファーベークの著述を複写することになつてしまふ。余は又、此小冊子に於て、是迄蘭領印度の地質を研究した人の名前を列挙しやうとも思はない。此等地質研究家は、今日迄其數五百乃至一千名に達してゐる。余は本書に於て、馬來群島に關する地質學的知識が、今日迄如何なる経路を取て進歩して來たかを述べ、且つ今日如何なる方向を取て進んでゐるかを明かにせんとするに過ぎない。地質學上の文献に關しては、余はファーベークの書を讀者に推奨するの外はない。

此處には、便宜上十九世紀迄即ち十八世紀の末葉迄を蘭人植民の第一期とするが、其第一期中に於て蘭領東印度を訪問せる歐洲人の中には、極めて少數の自然研究家があつたのみである。此時代に於て、稍々行届いた地質學的研究をなせる者には、有名なる博物學者ラムフユース(G. E. Rauphus)あるのみである。ラムフユースは十七世紀の後半紀アムボイナに於て働き、一七〇二年に於て此世を去つた。地質學方面の述作としては、アムボン地方博物館(*the Amboinche Rariteitenkamer. Amsterdam 1705*)がある。彼が此書中に於て述ぶる地質學的説明中には、首肯し難いもの多くを含んでゐる。併し、其れは寧ろ當然であつて、一科學としての地質學はラムフユースの歿後半世紀にして漸く出來上つたものである。其れにも拘はらず、彼の觀察が

頗る正確なものであつたといふ事實は、今世紀の初年に於て、彼の記載が基礎になつて、中古時代の化石がモルツケン諸島で發見せられた事に依て考へて見ても分ると思ふ。ラムフユースの地震並びに火山の爆發に關する各種の觀察も相當價値あるものであつた。

ラムフユースの死後約百年間、馬來半島に對する自然科學的研究は殆んど消滅した態であつた。然り而して、地質學も、此時期に於て、何等進歩の跡を示さなかつたと言て差支へない。

一八一一年より同一六年迄は、英國が一時吾東印度を領有したのであるが、東印度に屬する天然の研究は、英國の統治時代に再び芽を生じ、爾後日月と共に進歩し、今日に至るものである。此時代以後に於ける地質學的研究の進歩をば、吾人は三つの異つた時期に分て考へることを得る。即ち第一の時期は、一八一〇年から一八七〇年迄であつて、第二の時期は一八七〇年から一八九〇年、第三の時期が一八九〇年から今日に至る迄の間である。

馬來諸島の自然科學的研究は、同群島が再び和蘭の手に歸してから間もなく活潑に始めらるることゝなつた。科學的興味此物興は、和蘭政府の自然科學研究委員會(Natuurkundige Commissie)となつて現はれ、該委員會は一八一六年より一八五〇年迄存立したのである。該會の委員諸氏は、會成立の始めよりして熱心研究に従事し、馬來群島の各方面に向て探檢を試みた。彼等の爲せる探檢、參考品の蒐集には成功せるものもあれば成功せざるものもある。實地に就

て探検せる者の多くは、尙ほ春秋に富み乍ら熱帯病の爲めに斃れてしまつた。自然科学研究委員の爲せる調査は、多く動植物學的問題に限られてゐる。併し、或研究家例へばフォン・ガフロン (H. von Gaffron) ホーナー (L. Horner) シュローナー (O. Schwaner) 等の中部南部西部ポルネオに於ける探検報告は地質學的研究を主としてゐる。

此等官公學會に屬する研究員の外に、第一期に於て蘭領東印度の地質學に間接に貢献せるものが多々ある。其れは、同じく自然科学の教育を受けたる醫師、藥劑師、生物學者、化學者である。彼等は、地質學金石學に對しては門外漢である。ディレタントである。併し、蘭領東印度の地質學的現象中には、海面以下の土地に棲息せる和蘭人に取ては、注意を呼ぶものが多いのである。茲に於て乎、彼等は地震に就て、火山の爆發に就て種々の記載をなし、各種の礦物を分解し、温泉の成分を究め、火山に登り噴火口の形状を研究した。而して、彼等は爪哇の土地中に於て、硅化する樹木、大形の哺乳動物に屬する骨の化石を見て屢々驚かされたのである。斯くて、間接に蘭領諸島の地質學に貢献せる者の中に、マートン (J. J. Altheer) アリヒンス (N. A. T. Arriens) ショートローク (S. Bleekrode) シロークマンキト (J. H. Croockewit) ノロムヤン (P. Fromberg) フォーナー (P. J. Maier) マーネ (J. C. Bernadot Meens) ポラ (E. Polak) ナンント (D. W. Rosé van Tonningen) スター (E. Stür) ショリンガー (H. Zollinger) 等があ

り、此等の人口の研究は、悉くフアーベークの蘭領東印度の地質學に關する文献中に紹介せられてゐる。此等熱心なる科學者の中で、最も重要な位置を占むるものは、ブレイカー (P. Bleeker) である。彼は、一八五〇年を以て、バタビアに於て王立自然科学會 (Koninklijke Natuurkundige Vereeniging) を設立し、同時に蘭領東印度自然科学雜誌 (Natuurkundig Tijdschrift voor Nederl. Indië) なるものを出版し、前述諸氏の地質學に關するディレタント的研究を發表した。右の雜誌は、今日も尙ほ發行せられてゐるが、地質學に關する記述は、常に同誌に歓迎せらるる所からして、地質學的研究に興味を有するの士は、同誌に於て尠からざる参考材料を見出すのである。

併し、前述の諸學者は、地質の専門家でないから、彼等の調査は蘭領諸島の組織的地質學に多く貢献したとは決して申されない。

吾人の第一期と稱する一八一〇年より一八七〇年迄の間に於て、地質學に貢献し、且つ此期間に於て最も名を馳せた科學者をユングフーン (E. Jungfuhn) とす。ユングフーンは、主として爪哇島に就て調査研究を進め、蘭領印度中最も重要な位置を占むる此島に就て一の「モノグラフ」を發表した。此「モノグラフ」は、「爪哇」なる名目の下に一八五二—四年中アムステルダムより四冊物として出版せられてゐる。ユングフーンは、元來植物學者であるが、此等の

著書に依て爪哇の地質學火山學の進歩に尠からず貢献した。火山の構成に就て、スコローブ (Scorpe) の意見を辯護したものは、蘭領東印度の地質研究家の中ではユングフーンを以て嚆矢とする。ユングフーンは又、以前の研究家が、爪哇は火山島であると推定してゐたのに反し、爪哇の而も高山中に於て海底に於て見らるゝ外觀^{外觀}を持つてゐる第三期層が可成りの範圍に亘つて存在してゐることを見たのである。是れは爪哇の地質を決定する上に於て頗る重要な發見である。謂はねばならぬ。彼が作製せる爪哇島の地質地圖は、一八九六年に於て、すらすら、フアーベーク及フエンネター (R. Verbeek et R. Funnema, Géologie de Java et Madoua 前出) に依て眞面目に賞讃されてゐる。ユングフーンが爪哇滯在中蒐集せる各種の研究材料は、後に至りて色々の學者に依て攻究せられた。即ち、エーレンベルグ (O. G. Ehrenberg) ハンタラ (J. A. Harkins) マーティン (P. Martin) は彼の集めた動物化石を、グンバート (H. R. Goppert) は植物の化石を、ロリス (J. Loris) ヴーレンス (Th. J. Behrens) は各種の岩石をば夫々研究した。此等の研究は、悉くフアーベークの貢献中に登載してある。

前記自然科学研究委員、及此等委員等と違ひ、政府に何等關係ない個人研究の結果として、一八七〇年代の終り頃には、馬來群島の總ての部分に就て、統一はないが相當數の研究が發表せらるゝに至つた。殊にホルネオ等に就ては、以前よりはすつと消息が明かになつた。然り而

して、ユングフーンが勞作の結果として、群島中の一たる爪哇に就ては、豫備的ながら地質地圖さへ作製さるゝに至つたのである。

(以上を以て第一期に於ける地質學的研究の沿革を畢る。第二期に於ける沿革は次號に譲る)

□爪哇及新嘉坡の漁業 (上)

漁業振興の要件

一國の實業を振興せんと欲すれば農工商礦牧畜の外、漁業の一項に對しても亦其講究に意を用ひざるべからず、之れ漁業は一國に於ける實業の重要な位置を占むるが故なり。而して一國に於ける漁業の發達を求むるには經濟學上二條件を備へざるべからず。

一、天然の條件

一國の内凡そ河川湖沼に富めるものは均しく漁業を經營すべく、獨のライン河、埃のドナウ河の如き漁業の發達にて世界に著名なる事吾人の贅述を俟ずとも明なり。臨海國に至りては漁業の經營尤も便利と稱すべく、世界各國中英日兩國の如きは四面海を環し、其漁業の發達固より言を待す。即ち伊太利、丁抹、瑞典、諾威、希臘等三面海を環す國も亦漁業頗る發達し、瑞典産魚油の如きは全世界の需要を充すに至り、其漁業の盛なる事想見するに足るべし。其次は

則ち一國の海岸線甚だしくは長からずと雖、政府の奨励、人民の勤勉に因り漁業發達の望あるものにして、和蘭、葡萄牙等の國是れなり。此外スイス、ベルギー等の國は大川巨湖無く、復海にも近からず、故に農工商礦の各業に従事し得るのみなるを以て、漁業の微々として振はざるは亦怪しむに足らざるなり。

此に據りて觀れば國土の海に臨めるは實に天然條件中の第一要件たり。然も尙第二の要件あり、即ち海面の結氷せざる事及風浪の大ならざる事なり。全球の海洋中には終年結氷せるもの、或は終年結氷せざるもの、風浪の甚だ巨大なるもの、風浪の甚だ小なるもの等あり。一年の内數箇月の久きに亘り結氷せず、風浪も亦大ならざるものは即ち漁業を經營し得べきも海面の終年結氷する南北氷洋等の如き處は漁業に従事すべくもなし。又南亞弗利加沿岸の如きは風浪險惡にして、海面の漁船は常に覆没に遭遇するを以て亞弗利加土人と雖も生命の愛惜に堪へず、敢て輕舉に試みざるが故に、此等土地に於ては漁業の經營に極めて困難を感ず。斯の如きを以て結氷と風浪との兩項は捕魚の障礙となるべし。故に漁業は以上の障礙無き時始めて發達の望みあり。

二、人工の條件

一國に於ける漁業の盛衰は固より天然の條件を具備せると否とに因ると雖、人工の條件も亦

重要なる關係を有するものなれば今特に下に分述す。

甲、漁業の智識

實業の智識を増進するは實業發達の根本たり。漁業の發達を欲すれば亦此範圍を出る能はず、故に國家にて漁業の振興を欲しなば宜しく沿海各處に多數の漁業學校、水産講習所、水産試験場等を設け、人民の智識を開發して漁業の趣味を養成し、且つ探檢捕魚の智識を與ふべきなり。其他鹽漁及魚肉罐詰製造等の如きも亦科學の智識を有するにあらざれば完全なる結果を得る能はざるを以て、學校試験場等の項は極めて關係重大なれば其設立は實に漁業發達の第一義たり。

乙、漁業の資本

沿海漁業に従事する者は大部分無資本者にして、資本を有する者は極めて少く、大規模の經營に従事せんと欲するも財力に不足を來し、多年經營に従事する者往々あるも毫も進歩の狀無し。故に漁業の發達を欲しなば宜しく沿海各處に漁業銀行を設立し、以て低利資金を諸漁業家に貸與して船舶及漁具等を逐日改良せしめて捕魚を豊富にし、人民の消費に供すべし。遠洋漁業に在りては普通漁船は多く適用せず、勢汽船を用ふるにあらざれば不可なるを以て、宜しく資本を集め漁業會社を組織し汽船數艘を購入して使用すべし。且つ此汽船は僅に捕魚の用たるのみならず、各地の魚獲甚だ多き時は一處に於て賣盡す能はざるを以て、更らに汽船に積載し

他處に輸送販賣すべし。然れども此れは小資本漁業家の辦じ得る處にあらず。故に人民に銀行の設立、漁業會社の組織を提唱するも亦漁業發達の要件たり。

丙、漁業の調査

沿海漁業家は智識の缺乏せる者其多數を占め、調査の一事に對しては往々無關心の如し。故に宜しく政府より専門學者を沿海各處に派遣し、實地に調査すべきなり。凡そ産魚の多少、魚類の種別、需魚地方を宜しく詳細に調査し繪を以て圖説となし、各漁業家に配給して嚮道に資しなば漁業家の智識缺乏し居ると雖も、自ら圖を按じて捕魚に従事し得べく、捕獲せる魚類も亦易々として消費地を得べし。此れ亦漁業發達の要件たり。

爪哇漁業の現状

爪哇及新嘉坡は南洋の重要地點にして、日本人の此地に來り事業の經營に従事する者其數少からず、即ち大谷光瑞、久原商店及其他護樹栽培者、雜貨販賣者の如き人數極めて多く、歐洲大戰の際歐洲貨物は南洋に輸送さるゝ事不能に陥入りしを以て、日本商人の巨利を占めたるもの頗る多かりしが、歐洲戰中止され歐洲に於ける商業の舊日の状態に恢復さるゝに及び日本の商業も遂に江河落日の勢となれり。唯平日重要視されざりし漁業は獨り超然たる態度にて財界激變の漩渦に捲込まれず、戰前戰後共に大なる變化無く、顯著なる發展を見ずと雖も又意外

の蹉跌無く、洵に注目すべき現象を呈せり。一般實業家は皆謂ふ南洋の漁業は將來極めて有望なりと、洵に故無きにあらざるなり。茲に特に最近調査し得たる處を列記し、以て國人の參考に供せんとす。

爪哇は和蘭に屬し、日本人の該處に在りて捕魚に従事する者あるも毎に和蘭政府の猜忌を蒙るを以て自由に一切を經營するを得ず。若し大規模の漁業を爲さんか忽國際問題を發生すべし。海鼠、眞珠の採取等の如き有利の事業に屬すと雖も、上述の關係に因り終に大利を圖るべくも無し。夫れ爪哇は四面皆海なるを以て漁業の振興を欲しなば其策無きにあらざれども、和蘭政府は徒に土人の保護を知るのみにして、外來の移民に對しては種々なる制限を設くるを以て、其進歩は甚だ遅々たるなり。

爪哇土人は智識極めて低級にして、譬へば魚一尾の賣價十五錢なり若し百五十尾なれば若干なりやといふに至りなば、何錢得べきやを知らざる有様にて、彼等は數字を計算する能はず、金利の高低等に至りては更らに知らず、且つ資本を集合して會社を組織し、大規模の經營をなすが如きに至りては彼等の爲し得る處にあらず。和蘭政府は此に於てか見る處あり、特に經費を支出して水産講習所を創設し、以て土人を教導し、又漁業家の資力豊ならざるを慮り、漁具の無き者に對しては特に保證貸金法を用ひ、低利資金融通の途を開けり。爪哇の海面は一年中

絶えて暴風怒浪無く、然も和蘭政府は復漁港を修築し以て防風の用に供し、漁業の奨励に頗る盡力せり。然れども惜むべきは一般土人は尙科學の素養無く、此等文明利器に對して運用の道を知らざる事なり。

爪哇は宗教の關係に因り牛豚の肉類は一般土人の食ふ處にあらざるを以て、健康保持の恃む所は僅に魚類あるのみなり。爪哇に於ける魚類の消費は極めて巨額に上るを以て、沿海魚の捕獲以外全島に亘り多數の養魚池を掘り以て人民の食用に供せしも、近來人民の衛生上有害なるに因り漸次填埋せり。是に於て魚類は愈々不足を感じ、市場に於ける價値は逐日騰貴せり、然れども今日に至るも和蘭政府は尙補救の方法を樹てざるもの、如く、將來も土人に海産魚類の捕獲を奨励する以外恐らく他に方法無かるべし。

夫れ爪哇の地勢は四面海を環し且つ熱帯に位置するを以て、冬季に至るも結氷の憂無く、海面風濤も險惡ならず、誠に漁業の經營上好適地たり。和蘭政府の如く僅に土人を保護するに止り、外國の住民を極端に排斥する今日の狀態にありては發展の前途尙洋々たるべし。即ち土人は智識缺乏し、入海捕魚も從來の舊法を墨守し、改良進歩の途を知らざるなり。斯の如き狀態なるを以て、爪哇沿海には豊富なる海産物ありと雖、卒に放棄して採取の法を知らず、世界の寶藏たる此近海も其開發には相當の時期を要すべし。(農商公報六月十五日)

佛領印度支那

佛領印度支那教育狀況

佛國下院代議士レオン・アルシャンボー氏 (Leon Archimbux) は最近號の『亞細亞評論』(The Asiatic Review) に於て、佛領印度支那に於ける教育の現況に就て其大體を説明して居るが、今其大要を左に紹介しやう。

由來佛領印度支那には偉大なる智能を有し、且つ我が西歐文化を吸集同化する能力を有する種族が居るが、彼等は同時に或點に於ては寧ろ吾人の文明よりも優秀なる水平線にある極めて傳統古き文明を有して居るのである。

極東に於ては社會組織及び政治の凡てが教育其物に依據し居るが故に、其固有の教化は更に緊要なるものである。幾世紀に亙り支那に於ては教養ある人士のみが社會上の地位を占めて居つた。舊安南に於ても亦自然であつた。隨て男子の全生涯は擧げて考試通過の爲めに費やされ、八歳前後の童子が受験者として考試場に入る姿を目視するは敢て珍とせざる所である。其考試たるや數週間連續し、併かも受験者は何人と雖も足一歩も場外に出ずるを許されず、宛然固圍の人たるの觀があつた。而して其受験者數は時に數千に達することがあつた。

扱て適當なる教育の授施は母國に對する土民の反抗を防遏する上に於て緊要なりしは容易に

首肯され得る處であるが、事實印度支那に歐洲流の教育が布かれるまでには佛國の印度支那領有後三十年の歳月を経過して後の事であつた。而して佛國の注意は他方面に傾倒されてゐたので、此三十年間の教育上の閑却は何人も容易に了解され得る處である。一九〇八年まで安南人は安南固有の教育法に據らざるを得なかつた。其教育たるや彼等自身不必要と爲せる暗記的訓練及び脩辭法たるに過ぎなかつた。一九〇八年以降印度支那總督は最初の大學を印度支那に創設したるが、其成功は實に驚嘆に値し、僅か數日を出でずして、東京在住の貴族の子弟が其生徒として入學せる者があつた位であつた。然るに不幸改變の厄に禍せられて間もなく同大學を閉鎖するに至つた。幾歲月の流れ去つた後、サロー氏 (Sarrailh) の手に據り大學再建を見るに至り、同氏が計畫の成功せることは安南人すら之れを認知する處である。昨年同大學出身の范瓊氏 (Phan Quynh) は或る講演に於て次の如く言明してゐる。

「サロー氏は二千年に餘る歴史を背景とし、多年の國民的傳統を有する舊古の民族を統治するに、阿弗利加の原始民族に蒞むが如き政策を以てするの不可能なるを知悉して居つた。……同氏の言説は直ちに民衆の心琴に觸れ印度支那全土に其反響を惹起し、斯くてサロー氏は永久に安南人の民心を收攬するに至つた」

即ち今日印度支那に於ける教育の基礎は實にサロー氏に依りて据へられたものと云ふも過言

でない。

印度支那の教育制度は今や完全なる組織となつてゐる。而して其制度は普通教育として初等、中等、高等の三階段に分れ、前二者中には佛人學校並に共學學校とが含まれてゐる。尙ほ別に實業的特殊教育もある。

初等教育としては佛人のみを教育する初等學校即ち *Ecoles primaires élémentaires françaises* が二十四校(生徒七百八十六人)ある。主に土人教育を目的とした *Ecoles primaires franco-indigènes* が二、八一六校あつて生徒二、四、五、三、二二人を收容してゐる。此學校に於ては學課は總て安南語を以て教授され、併せて極て初歩の佛蘭西語を課してゐる。然し重要都邑に於ける初等學校に於ける學課及び諸設備は完全に、正課として佛語が教授されてゐる。此種の學校は二三八校を數へ、生徒數三八、三、三、四人に及んでゐる、尙此等初等學校以外に補習學校あり、一六學級、二、七、四、九人の生徒を數へてゐる。要するに初等教育は年々發達の道を辿り、昨年の如きは交趾支那のみにて七六校の初等學校が増設されたのである。

中等教育は河内高等學校 (*Lycée de Hanoi*) と西貢に於ける中學校 (*Collège Chasseloup-Lanhat*) との二校に於て施こされてゐるが、前者は生徒六三九人、後者は二五一人を有し、共に佛國の中等教育を施し、前者の或科に於ては雜甸語と希臘語をも課し、後者に於ては安南人に適應せ

る特殊の教育を授けてゐる。今兩者を比較する時は、西貢側の學業の程度は、到底河内の夫れに及ばないのであるが、夫れは大分氣候極めて陰鬱なるに原因するらしいので、ランビヤン高原 (Plateau de Langbian) のダラ (Dala) が將來英領印度に於けるデリー (Delhi) の如き都邑となるに於ては、大方同校も亦同地に移轉さるゝに至るだらう。

職業教育であるが、中等工業教育を授ける學校として、佛人の所謂 Ecoles Professionnelles がある。此種の學校は印度支那各州に一校宛設置されてゐるが、夫れ以外に一九〇六年西貢に設立されたる亞細亞人機械工業學校 (Ecole Pratique de Mécaniciens Asiatique) がある、豫科三年、豫科に於て習得せる智識を實習に應用する本科二年、都合五箇年で卒業するのである。又安南工藝教授を主眼とする工藝學校がある。加之ジャデン (Giardin) に圖案及び彫刻の學校、チュードーモー (Thudomoi) には家具工藝の學校、ビエンホア (Bienhoa) には窯業並に冶金の學校があり、又東埔寨の首都プノンペン (Phnom-penh) には各般のクメール藝術の模造と應用とを教授し、以て東埔寨特有の工藝を保護發達せしむる目的の工藝學校がある。又河内の職業學校に於ては家具製作、彫刻、冶金、裝飾、機械工業、自動車運轉法、レース製作等を教授してゐる。此種職業教育は、其性質上、工藝的職業に従事する階級社會の歡迎する處となつた。

此等教育組織を綜合向上せしめたるものが河内に於ける印度支那大學 (Université de l'Indo-

chine) にして、同校は一一〇名の教授と五二五名の生徒とを擁し、法科、商科、理科、醫科、農科、教育科とに分かれ、主として安南人の教育を目的としてゐるが、支那人學生も三十名在學してゐる。而して同大學は勿論サロー氏の設立に係るものにして、實に安南人の多大の欣喜と誇りとの焦點となつた。

以上が印度支那に於ける大體の教育制度である。

□佛領印度に於ける刊行物

佛領印度支那官報の發表する處に據ると、一九二三年上半期に於て政廳内圖書係が受入れたる印刷物は三、一一〇種に及べるが、今印度支那内にて印刷發刊せられたるもの、定期刊行物六四種、不定期刊行物一一種、合計一七五種に及び、今之れを地方別並に種類別に示せば左表の如し。

州名	定期刊行物		不定期刊行物		合計
	佛語	安南語	佛語	安南語	
安南	三	一	一	一	六
東埔寨	一	一	一	一	四
交趾支那	一	一	一	一	四
小計	五	三	三	三	一四
佛語	一	一	一	一	四
安南語	四	二	二	二	一〇
地圖及圖表	一	一	一	一	四
合計	六	五	五	五	二一

老	東	合
揚	京	計
一	一	三
一	一	二
一	一	四
一	一	三
一	一	三
一	一	二
一	一	三
一	一	三
一	一	五
一	一	五
一	一	八
一	一	二
一	一	一
一	一	九
一	一	二

尙は定期刊行物に於ける主なる變動及び代表的單行印刷物を示せば左記の如し。

甲、定期刊行物

(イ) 安南

一、Memorial indochinois.

一九一九年十一月の創刊にかゝる本誌は一九二一年十二月號即ち第二十五號を以て廢刊となる。

二、Aux Fils de France.

キノーン印刷所に於て編輯發行せらるゝ評論雜誌として本期に入りて創刊せらる。

(ロ) 東埔寨

變動なし

(ハ) 交趾支那

一、La Revue du Tourisme.

西貢に於て發行せられ、印度支那旅行協會並に交趾支那東埔寨自動車業組合共營にかゝる機關雜誌である。

二、La Verité.

獨立共和を標榜する新聞

三、La Voix annamite

安南人の利益保護を目的とする機關誌。

四、Le Dong-Phap-Thoi-Bao(東法通報)

本誌は安南語にて書かれたものである。

尙は本期に入り廢刊となるものを舉ぐれば左の數種である。Les Binettes ; La Cochinchine liberale ; Le Courrier de l' Ouest ; Le Bulletin de l' association pour la defense des interets des fonctionnaires et agents Coloniaux ayant participé aux operations de la Guerre.

(ニ) 老揚

變動なし。

(ホ) 東京

一九二二年に刊行せらるゝ筈にして、實は本期に入りて前年分が發行されたるもの、即

第九十二號

ち定期より遅れたる定期刊行物は左の如し。

- 一、 Bulletin administratif du Tonkin.
- 二、 Bulletin municipal de la Ville de Hanoi.
- 三、 Bulletin de l'Amicale des anciens Legionnaires.
- 四、 Bulletin économique de l'Indochine.
- 五、 Bulletin de la Société medico-chirurgicale.
- 六、 Bulletin officiel en langue annamite.

尙ほ未だに前年分の刊行を見ざるものに左記の二種がある。

- 一、 Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient (No 1, tome XXI, année 1922)
- 二、 Journal judiciaire de l'Indochine (Année 1922, 1923).

乙、不定期刊行物(單行本)

一九二三年上半期中に當局に納本せるもの一六部(譯者の計算によれば一一部)にして、之れを國語別に示せば佛蘭西語のもの四三部(譯者の計算にては三八部)、安南語のもの六五部、地圖及圖表八部である。

次に佛蘭西語の單行本中代表的のものは殆ど總てが Revue indochinoise の抜冊別刷である。即ち

左記の如し、

- 一、 Le Breton : — Le Thanh-hoa pittoresque.
- 二、 Dr. Guillemet : — Par Sentiers Laotiens.
- 三、 Ch. Patris : — La Baie d'Along et de Fai-tsi-tong.
- 四、 Bui-han-van : — La France, les Temples d'Angkor.
- 五、 Paumotier et Menetrier : — Grammaire Cambodgienne.
- 六、 Ch. Patris : — l' Histoire Annam (再版)

其他政廳地理課編纂の地圖中下記の各地方分圖が發行された。Bên-Cần, Cán-Khai, Gò-dau-Lay, Hiep-thành, Malaxay, Tân-phu-thoang, Taurane, Tây-ninh.

尙ほ安南國語を以て書かれたものは、大部分小冊子に過ぎずして價值尠きものゝみで、教課書類、詩集、小説、支那稗史類が多く、其他のものとしては基督教傳道用冊子と若干のカトリック教及び佛敎の教義書類である。

□佛領交趾支那人種別人口一覽表 (其二)

省	名	歐洲人	安南人	東埔寨人	支那人	シン・フ	印度人	其他	合計
Rach-Gia		七四	二五,七七六	四,七七七	四,三三五	二,七七一		一	二九,三六六
Soc-trang		一三	一八,三三八	四,四七九	一〇,八六五	三,〇五五		一	八五,二九五
Tan-an		一〇	一〇,五〇五	七九	九,七七一	二,九五五		一	二〇,五五五
Tay-yinh		八	七,六六八	九,九七七	六,八〇〇	七,九九		一	八九,二九九
Thu-dan-mot		一〇	一〇,〇〇〇	二,四九二	二,三三八	一,〇九七		一	一四,八八七
Tra-Yah		四	一三,一〇〇	六,三二二	六,四九九	九,九三三		一	二四,八二一
Vinh-long		一	三,九三三	六,三三	五,八六	三,七九四		一	一四,九四五
Saigon (Ville de)		五,〇〇〇	五,〇〇六	一五	三,一四四	一,四三	東京人及各種人	三,一七六	六,二二六
Cholon (Ville de)		八,〇〇〇	四,一三六	二七	四,八六七	三,五三三		三,九二	一六,八七
Paulocondore		一五	二四	一	八	一		一	四六
		九二五	三二,〇七六	二五,〇三三	一四,一五五	五,三九二	四,五三	三,七七四	三六,七〇〇

備考 (一)、(二)、(五)、(六)馬來人、(三)チャム人、(四)モイ人、一一、〇一五、馬來人四五三、老婦人一三、(六)馬來人、
 本表は Annuaire general de l'Indochine, 1923. に據り作製せるものである。